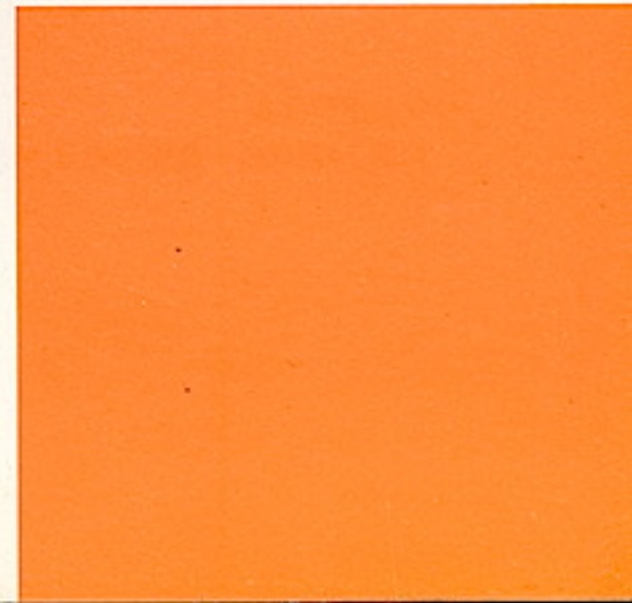
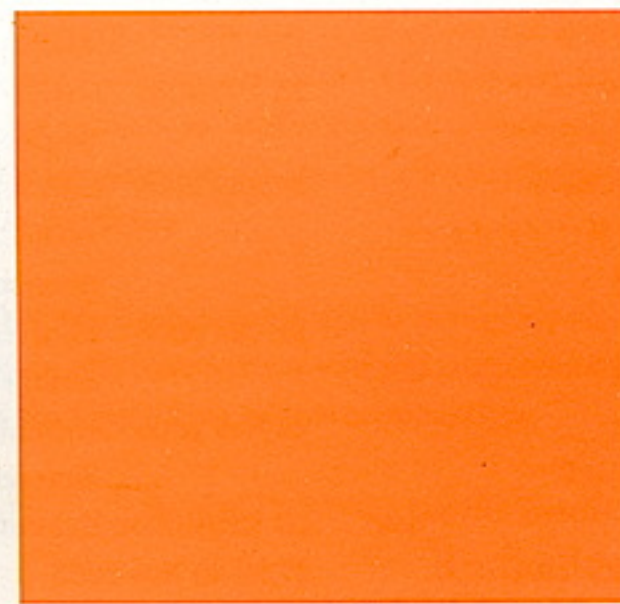




平成17年度  
泉南市文化体験プログラム支援事業  
実施報告書

2005  
Sennan city cultural experience  
support program Activity Report





## 遺跡と創造

- ◇アート野外展  
アーティスト・イン・レジデンス
- ◇ワークショップ[アート探検隊]  
アート探検隊・展
- ◇シンポジウム

本プログラムは平成17年度、文化庁「地域教育再生プラン」の一環として泉南市地域こども教室実行委員会を実施主体に、地元泉南市に拠点を置く芸術家グループ、アートベースナルの助言、協力のもと、「遺跡と創造」と題して開催された。

広い大阪平野の南端に位置するこの泉南地域は、古くは石器時代より人々の暮らしの痕跡が認められ、上代には既に海会寺遺跡に見られるように文化交流の要所でもり、その後の歴史の変遷にあっても、時代時代に即した発展と継続を続け今日に至っている。こうした地域特性に鑑み、古代より現在を経て未来へとつながる人の夢と創造力をテーマに、子供たちにも地域の古い歴史や文化とともにいっそう広い世界を体験してもらおうと、企画されたものである。普段接することの少ない現代アーティストと共に、歴史をふり返り、「今」の現代美術に直接触れ、未来への「創造の芽」を育んでいけたであろうことを、これからも期待してやまない。

プログラムの中核になったのは、白鳳時代の史跡、海会寺跡にて2005年11月20日より十日間にわたって行われた「アート野外展」で、アートベース・ナルの呼びかけで、広く全国から四名の招聘作家、関西から十四名の計十八名のアーティストによって行われた。野外展としては十分な会場の広さがあり、作品制作にあたっては、あらかじめ各作家がそれぞれのやり方でなんらかのかたちで、子供たちが直接作品そのものを体験できるように配慮された。この点、美術展としては他にあまり類を見ないもので、作家たちにも良い刺激となったようだ。多くの作家は表現としての作品制作にあたっては特に大人子供を意識することなく進めていくが、子供たちにとってはそうした「美術作品」に積極的に関わってゆくことがあらかじめ許されているのと、そうではないのとでは明らかに経験の濃度が違ってくるであろう。単なる「鑑賞」ではなく「体験」をも提供できたことは今後大きな意味を持つてくると自負している。

会期初日にはシンポジウムに続いてオープニングセレモニーも行われ盛況のうちにスタートした。

シンポジウムでは司会進行をアートベースナルの北村暢が、パネラーに四名の招聘作家、埋蔵文化財センターの岡氏を迎えて、出品作家と共に、子供たちや市民のかたがたを交えて、活発な意見交換がなされた。史跡の紹介に始まり、美術、文化論のみにとどまることなく、教育のあり方、行政の役割などについても闊達な言及がなされた。作家自身による作品解説では子供たちにも制作の裏側が垣間見れたことと思う。

また野外展に関連しては、それに先だって、滞在型の作品制作の場としてのアーティスト・イン・レジデンスも11月16日から五日間、「アートベース・ナル」において公開されたが、期間も短く、会場への搬入と重なっていたこともあり、広く市民に知られるというわけにはいかなかった。この「レジデンス」というシステムは国際的には、現代美術にとっては（もちろん音楽や他の芸術分野でも）もはや不可欠のものとなりつつあり、日本でもこうした拠点の必要性が久しく言われている。

そしてもうひとつの重要なプログラムがワークショップ[アート探検隊]である。これはアート野外展から逆のぼること四ヶ月前の7月24日を第一回「古代土器作りに挑戦」として、会期中の11月26日の「古代音楽とアート」まで計五回にわたって行われた。

「古代」を主なキーワードとして、アーティストと子供たちが直接コミュニケーションをとりながらテーマに応じて思い思いのものを作ったり遊んだりした。通常の「工作教室」と大きく違うのは基本的に「共につくる」ということであろうか。ここではアーティストは単なる指導員ではない。見本を作ったり助言したりはするが、自分の考えを伝えたり、何がおもしろいか一緒に考えたりする方が重要であって子供たちにもそのことを要求する。成果はすぐに出るものではなく、やはり未来へとつながっていくものだからである。

五回のワークショップでの子供たちの「作品」や活動概要を、ここでも「体験」を主眼に置き、11月27日から三日間、泉南市文化ホール展示室にて「アート探検隊」展として開催し、すべてのプログラムが終了した。

終わりに本プログラムが四ヶ月もの長きに渡って滞りなく終えることができたのも、準備期間も含めてひとえに関係各位のご協力の賜物と、深謝に堪えない。ここにあらためて御礼申し上げます。

何より、参加してくれた子供たちに最大の謝意を送りたい。



## Remains meet Creation

Outdoor art exhibit  
Artists in Residence  
Workshop Art Expedition  
Art Expedition/Exhibit  
Symposium

This event program was held as 2005 Cultural Affairs Agency "Local educational Activity", entitled "REMAINS meet CREATION" by Sennan Children's Activity Executive Committee under the guidance and professional counsel of ART BASE NULL, the artists group in Sennan.

Sennan area which is located at the south end of Osaka plain, is also known for its long history of human habitat. The history goes back to Stone Age as you can see in the Kaieji historic site. This area has always been the core of cultural exchanges and the prosperity and development still in progress today. This project was organized for children to expand their sensibility by feeling people's dream and creativity that have been traveling from ancient to present, and to our future. Also this will give them opportunity to realize their local history and culture. I hope that giving them chance to work with modern artists and actually touch the art, will eventually sprout "bud of creation" in them.

Major event of the project was the outdoor exhibition that took place on 20-30 November 2005 at Kaieji historic site. ART BASE NULL called on fourteen artists from Kansai area and four artists from all around Japan to plan this exhibition. Artists presented their original work in this immense venue. Style of their work was each different but what they had in common was that children could actually touch and feel the art in one way or another. This unprecedented exhibition certainly stimulated artists' imagination. And for children, being allowed to touch the work makes it a big difference; it is an experience rather than viewing.

Symposium and the opening ceremony on the first day of this program warmed up the whole project. And the Artist in Residence at ART BASE NULL was open to public during its period of five days from 16 November 2005. Despite of the strong need of this Residence system in Japan, it was less known because of the carrying-in schedule and its short period of time.

Another important event of this project was the workshop "Art Expedition", which goes back to four months before the outdoor exhibition. The first workshop was on 24 July 2005 and four more workshops were held after that till November. Children and artists worked together having "ancient time" for the keyword, but this was no typical handicraft class. The most important was to cooperate, and to share the opinions of both children and artists. The outcome of this workshop may not be seen at once because it something that blooms in their future. The whole project ended with the exhibition of Art Expedition.

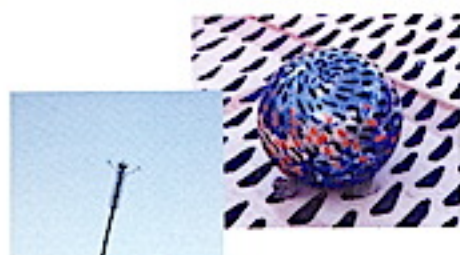
And last but not least, I would like to extend my appreciation to the effort and the cooperation of involved people. And of course, thanks to those brilliant children of Sennan.





1950 大阪生まれ  
 2005 ウィンドドローイング (CAI ハンブルグ・ドイツ)  
 2004 クンストインディテューン (クンストカサ・オランダ)  
 2003 ウィンド (オーフォースクンストフォーリン・デンマーク)  
 2002 オフサイトプロジェクト (アイコンギャラリー・イギリス)  
 2001 大阪トリエンナーレ 2001 / 受賞 (海岸通りギャラリー・大阪)  
 2000 ミレニアム 2000 に招待される (ボールステート大学・アメリカ)

1950 Born in Osaka  
 2005 Wind Drawing (CAI Hamburg, Germany)  
 2004 Kunst in de tuin (Kunst Kas, Holland)  
 2003 Wind (Aarhus Art Center, Denmark)  
 2002 Off site Projects (IKON Gallery, England)  
 2001 Osaka Triennale 2001 award (Contemporary Art Space Osaka)  
 2000 Invited to the Millennium 2000 (Ball State Univ. U.S.A.)



## マインドオブウインド

古代から延々と吹き続ける風を使った、風まかせの作品です。

自由に作って自分の風をお持ち帰り下さい。ドローイング用紙とペンは引き出しに入っています。

## Mind of Wind

This work totally depends on wind that hasn't changed a bit since ancient times. Please feel at ease to make one and bring home your own wind. Papers and pens are in the drawer.



ウエダリクオは今回子供たちのためにタイプの違う二点の作品を用意した。そのひとつは「ヒストリーメーカー」という彼独特のレトリックを含んだ、示唆に富んだゲームのための作品になっている。朱色に塗られたリングのような柵に鳥居を模したようなゲートが開いて、遊技者はビーチボールほどもある地球儀のボールを、竹製の長いスティックでつついて、相手の陣地に押し込めば勝ち、というシンプルなものだ。何人でもできるが結局勝ち残った者が「地球」を手に入れる＝めんどろを見る、ことになるという暗喩でもあり、直感できる子供たちも何人かはいたようである。

いうまでもなくこのゲームは大人気で、会期半ばも過ぎずに地球儀ボールは壊れてしまった。が、ウエダはそれをも想定していたという。地球儀は衛星写真によるリアルなもので、その全面に作家によって黒の点描が打ってあり、ところどころ赤い色になっている。注意深く見ればそれが単なる模様ではなく、現在の世界中の紛争地を表していることが解る。作家はアイロニーをもこめて、市販の創傷絆創膏を使って補修した。

最終日まで休みなく多くの子供たちが遊んだが、ボロボロになって、絆創膏だらけの「地球」を見て、彼らは何を思い、感じとっていったらだろうか。

もう一点は、よりアーティスティックなもので、作家のシリーズでもある風によるドローイングである。木の枝から延ばされたロッドシャフトの先端にドローイングペンが取り付けられ、「風」によって絵を描くというもの。事務机や仮設材を使って立木や風による現象そのものをも取り込んで、装置全体を見事に「作品」に昇華させている。

「作品」によって描かれたドローイングの「作品」は子供たちは持ち帰っても良いことになっていて、思わぬ抽象絵画のプレゼントが、参加した子供たちには、きっと生涯の宝物となってくれるだろうことを祈ってやまない。

## ヒストリーメーカー

縄文時代が約1万年間続いた事を知り、驚きをおぼえました。私たちの時代は、あとどれくらい続けられるのでしょうか。縄文時代は協力と共同の時代であったと言われています。水稲耕作がはじまった弥生時代に、水田に使用する土地の拡大争いと水争いで集落、村落間の争いがはじまり、列島規模にまで広がっていったとあります。そして現在に至っています。

レヴィ=ストロースによれば、古代は我々が想像する以上に豊かな社会だったそうです。

## History Maker

I was stunned to learn that Jomon Era lasted about ten thousand years, and in the mean time I wonder how long our time could last. Jomon Era is also called days of collaboration and partnership while next Yayoi Era is known as days of land - scrambles.

According to Claude Levi Strauss, ancient times were much richer society than that of what we imagine.





Host:  
Cultural Affairs Agency Sennan City

Main operator:  
Sennan Children's Activity Executive  
Committee

Cooperation:  
Art Base Null

Approval:  
Osaka Prefectural Welfare Facility in  
Sunagawa

Photographer: Kaori Suto  
Yoshihisa Sano  
Humiko Shimeno.  
Rikuo Ueda  
Mayuko Sumioka

Translator: Sayaka Tsuda

Editor: Art Base NULL  
Non Kitamura

publisher:  
Sennan Education Board Lifelong  
Learning Department Sennan  
Children's Activity Executive Committee

All rights reserved.



参加アーティスト  
井手哲比古  
伊藤ひろ子  
長谷川 哲  
村田 千秋

ウエダリクオ  
山本 恵子  
山崎由美子  
玉城正紀  
玉城正雄  
松塚哲子  
友井隆之  
えんどうひとみ  
佐野 祥久  
住岡真夕子  
津守 泰子  
池田 真文  
石田 文  
北村 暢

主催  
文化庁  
泉南市

実施主体  
泉南市地域こども教室実行委員会

協力  
アートベース・ナル

協賛  
大阪府立砂川厚生福祉センター

写真撮影  
周藤 香織  
佐野 祥久  
ウエダリクオ  
メ野 文子  
住岡真夕子

翻訳  
津田 さやか

責任編集  
北村 暢  
アートベース・ナル

発行  
泉南市地域こども教室実行委員会  
〒590-0592 泉南市榑井一丁目1-1  
泉南市教育委員会生涯学習課内

平成17年度  
【文化体験プログラム支援事業】

©泉南市地域こども教室実行委員会  
本誌掲載記事の無断複写・転載を禁じます。